

おすすめ本紹介

◆テーマ◆

夏休みに読んでみない？

●with you(ウィズ・ユー)

濱野京子 作

くもん出版

表紙のふたりは、中3の悠人と中2の朱音です。悠人は、高校受験の悩みや、自分の家族への複雑な感情を、振り払うかのように、毎夜ランニングに出かけていました。ある夜、ランニング途中で、公園でじっとブランコに座り続ける少女・朱音と出会います。

やがて、朱音が、病気の母親の介護や幼い妹の世話、家事をひとりで背負っていることを知った悠人は、彼女の力になりたいと考えるのですが…。

朱音のように、本来大人が担うと想定されている、家事や家族の世話などを日常的に行っている子どもは「ヤングケアラー」と呼ばれます。最近、国による初めての実態調査が行われ、中学生のおよそ17人に1人がヤングケアラーであることが分かったそうです。

★ヤングケアラーについて詳しく知りたい時は、下記等を参考に。

●ヤングケアラーについて(厚生労働省)

<https://www.mhlw.go.jp/stf/young-carer.html>

●知ってほしいヤングケアラー(NHK)

<https://www.nhk.or.jp/shutoken/yc/index.html>

●アーニャは、きっと来る

マイケル・モーパージュ 作

佐藤見果夢 訳

評論社

物語の舞台は、第二次世界大戦中のフランス山間部、スペインとの国境に近い小さな村。12歳の少年ジョーは、戦争に行った父にかわり、羊の世話をしています。

ある日彼は、山の中で見知らぬ男に出会ったことから、ナチスから逃れたユダヤ人の子どもたちが、オルカーダばあさんの家に隠れ暮らしていることを知り、手助けするようになります。

そのころフランスはドイツに侵攻されており、この村にも、スペインへの亡命者を監視するためドイツの守備隊が駐屯し、「ユダヤ人をかくまう者は射殺する」と警告していました。

にもかかわらず、村人たちはユダヤ人の子どもたちを逃がそうとします。村人総出で実行したその計画とは…。

★ナチスのユダヤ人迫害について知りたい時に参考になる本

●アンネのこと、すべて

アンネ・フランク・ハウス編 小林

エリカ訳 石岡 史子監修 ポプラ社

●なぜ、おきたのか？

クライヴ・A・ロートン作

石岡史子訳 岩崎書店

●牧野富太郎：日本植物学の父

清水洋美 文 里見和彦 絵

汐文社

表紙には、笑顔でこっちを向いている蝶ネクタイのおじいさん、その手は、採集したばかりの植物を新聞紙に挟もうとしています。持ち帰って標本にするのです。

この人は、日本植物学の父と呼ばれる牧野富太郎。日本全国の野山を駆け巡り、集めた標本は40万点。数多くの新種を発見し、1500種類以上の植物に命名しました。生まれたのは、年号が明治に変わる少し前、文久2年ですが、彼の手がけた『牧野日本植物図鑑』は、令和の今でも書店に並んでいます。

ここで紹介するのは牧野富太郎の伝記です。巻末には年譜が掲載されており、1916年(54歳)のところに「びんぼうで絶体絶命になり、それが新聞記事になる。」とあります。実は彼、裕福な商家の生まれなのですが、どうしてそんなことになったのでしょうか？そもそも貧乏になったことが新聞記事になるって、いったい？

★魅力的な博士(科学者)たちの本

●生命科学者たちのむこうみずな日常と華麗なる研究

仲野徹 著 河出書房新社

●バッタを倒しにアフリカへ

前野ウルド浩太郎 著 光文社